

「清流の国ぎふ」から

岐阜県総務部長 坂口 和家男

1 プロローグ

「岐阜!!? どこにあるの???」

「ギフ??? …書けない。」

岐阜県での勤務が決まったことを友人・知人に話すと、散々な反応であった。

しかし私は、内心でガッツポーズをしていた。岐阜県と言えば、3000m級の槍ヶ岳や穂高連峰を擁し、また、知る人ぞ知る奥美濃の山々のある「山の国」。若いころは、GWに越美南線で石徹白から入り、石川県とまたがる白山連峰を縦走したり、春に福井県境の三周ヶ岳、三国岳をカンジキを履いて歩きまわったり、冬に滋賀県境の伊吹山で山スキーの練習をしたり、夏に長野県境の双六岳や三保蓮華岳を経て雲ノ平、薬師岳（富山県）に至ったりした。いずれも素晴らしい思い出である。（なぜか県境ばかりである）

私は、勇躍、家族4人（私、妻、小学生男子×2）で岐阜に移り住んだ。そこで、全く知らなかった岐阜の魅力を体感することになる。本稿では、そうした岐阜の素晴らしさ、そして奥深さについて、少しでもお伝えできればと思う。

なお、岐阜に来てまだ1年余りの経験しかないことから、岐阜の魅力を余すことなくお伝えできないこと、また、アウトドアに偏っていることはご容赦いただきたい。本稿中、意見にわたる部分は、私の個人的な見解である。

2 清流

岐阜県を象徴するのは「清流」である。

これは、文字通り「水がきれい」ということを、まずは意味する。実際、岐阜で暮らし始めて

から、ミネラルウォーターを買ったことがない。普通の水道水がおいしいのである。

しかし、それ以上に「清流」が含意するものは奥深く、幅広い。

岐阜県は、飛騨の国と美濃の国を併せた県である。飛騨は3000m級の山々を有する「木の国」「山の国」、美濃は木曾三川（長良川、木曾川、揖斐川）を有する「水の国」。これらを指して「飛騨のうすい山濃水」とも言われる。

豊かな森が清流を育み、その流れが県内の田畑や街々をあまねく潤し、人々は、鮎など清流の恵みをいただきつつ、また、それを守りながら、清流とともに生きていく。飛騨の山岳地帯で生まれた流れは、美濃の海拔0m地帯までを貫いていく。「清流」は、まさに岐阜県を象徴する言葉と言えるよう。

清流長良川と、それを生かし、また、それに生かされる人々のシステム全体が評価され、「清流長良川の鮎」が一昨年、世界農業遺産に登録された。

シベリアのように、誰も住んでいないところの川がきれいだということは、特に驚くに値しない。（シベリアに他意はない）

しかし、例えば長良川で言えば、郡上市（住民約4万人）の大日ヶ岳に源流を持ち、郡上八幡（宗祇水が有名）、美濃市（2万人、曾代用水（世界かんがい施設遺産）が有名）、関市（9万人、小瀬鶴飼が有名）、岐阜市（41万人、長良川鶴飼が有名）と、多くの市街地を流れ下ってくるにもかかわらず、岐阜市内でも泳ぐことができるほど

に、その水は澄んでいる。それを維持するためには、豊かな森づくりからはじまり、どれだけたくさんの人々の努力が積み重ねられているか。その努力を自覚しているからこそ、岐阜の人々は清流に誇りを持っている。

家族で長良川の自然を守るNPOに参加しているが、参加者はそれぞれサラリーマンであったり、教師であったり、主婦であったりする。このように仕事は様々であっても、清流を守る、という一点については皆強い気持ちを持っていることはヒシヒシと感ずるところである。

とはいえ、そんなに堅苦しく考えることはない。夏中、川では、子どもたちが泳ぎ、飛び込み、魚を追いかけて、歓声が途切れることはない。そうしたことができる環境を次代に残していきたい、そのために自分たちができることをできる範囲です、という人々の集まりがあちこちに存在している。

私は現在、岐阜城のある金華山のふもと、長良川の近くに住んでいる。川の清掃活動にも参加しつつ、夏には何度も長良川で泳いだり、小魚を獲ったり、カヌーで下ったりした。この楽しさ、気持ちよさは、ずっと引き継がれていってほしいと強く思っている。

3 清流にまつわるエトセトラ

「岐阜県のいいところって、どんなところ？」と聞かれることがある。「豊かな自然」という答えが想定されるが、そんなことを言えば、シベリアでもどこでも同じである。(繰り返すが、シベリアに他意はない)

私としては、「地域のコミュニティの元気さと強靱さ、そして人の良さ」と答えたい。長良川流域の各地でも、飛騨の小さな山村でも、豊かな自然・清流があるのは当然として、それを守る人々、また、ヨソモノにもその良さを伝えていこうとするコミュニティの積極性、その背景におそらくある、自らの歴史・伝統への強い自信・自負と暮らしの豊かさ、これらがすべて相俟って、岐阜の良

さを作り出しているのではないだろうか。

だからヨソモノが来たとしても、頭から排除されることはなく、「こんなに素晴らしいものがあるから、是非体験していつて。食べていつて。」という対応になるのだと思われる。岐阜県に移住してくる若い世代が増えているということも、その表れではないだろうか。

(1) 長良川源流の大日ヶ岳

大日ヶ岳(1709m)の裾野には、高鷲スノーパークとダイナランドという大規模なスキー場が2つあり、そこのリフトに乗れば1500m付近まで容易く到達できる(登山届もリフト券売り場で出すことができる)ため、天候が安定し、雪も締まっている春季は比較的登頂が容易である(ただし、ある程度の積雪期登山の経験は必須。また、2万5千分1地形図は必ず携行すること。)。私は3月に家族でスノーシューを履いて登ったが、気温が高く汗だくになった。山頂からは北アルプスや白山連峰、乗鞍岳、御嶽山など360度の眺望…のはずだったが、あいにく雲が多く、白山がちよっと見えただけだった。下山はソリ(100円ショップで買った)や尻セードで快適に下った。

(2) 蛍

清き流れに蛍は棲む。大阪、東京といったところで過ごしてきた私にとっては、蛍というのは普段目にすることがない生き物であった。岐阜に来て蛍が見たいと思い、郡上市和良町まで出かけた。そこでは概ね20時を過ぎると、川沿いに大量の蛍のウェーブが見られ、まるで地上の天の川のようなであった。その感激を岐阜市の人にする、「蛍なんて市内でも見られるのに、なんでわざわざ。」という素っ気ない反応。確かに、岐阜市のHPでも蛍鑑賞スポットが載っているし、岐阜の人には、あまり有り難みがないようだ。

(3) 美濃和紙

美濃市の長良川沿いで製紙が発展した。古代から製紙は行われていたものの、ようやく室町時代ぐらいから盛んになったらしい。池波正太郎の小

説で「サツマ」といえばタバコだが、江戸時代「ミノ」といえば障子紙を意味した。

楮こうぞという和紙の原料が豊富だったことに加え、紙の白さを出すために楮の白皮を清らかな流れに晒す必要があったこと、また、長良川の水運を活用できたことが、当地で発展した理由らしい。今やユネスコ無形文化遺産に指定されている。

(4) 鵜飼

鵜飼は全国各地で行われているが、宮内庁式部職鵜匠として鵜飼をするのは長良川鵜飼と小瀬鵜飼だけである。長良川の一定区間を禁漁区としており（鮎にしてみれば関係なく泳ぎ回るだろうが）、そこで年に数回御料鵜飼が行われ、獲れた鮎は宮内庁に納められるという。

友人の鵜匠さんの家を見せていただいたが、小さなプールのようなところで鵜を20羽程度飼うとともに、鵜飼で使う蓑や縄を自分でなっている。さらに、シーズン中であれば、毎晩鵜飼がある。そうした多忙さに加え、何より、男子が世襲で鵜匠職を継ぐという伝統があり、鵜飼を次代に伝えていくのは大変なことのようだ。

鵜匠さんに聞いたトリビア①。鵜は、鮎だけでなく、手当たり次第に魚を捕まえて飲み込む。ウナギをくわえると、鵜のくちばしに巻き付いて鵜が難儀する。そこから「ウナギ」という名前になったという。

トリビア②。宮内庁式部職は名誉なことだが、御料鵜飼をするときの手当しか出ないそう。

名古屋駅からJRで20分。ふと岐阜駅に降り立ったならば、岐阜バスに乗り換え、長良川まで15分。そこで乗合船のチケット（3400円）を買えば、その日の鵜飼を見ることができる。夏の日暮れ、船に乗って川面を吹く風に頬をなぶられながらビールを飲むのは、想像以上の快楽である。なお、鵜飼の開催期間は毎年5月11日から10月15日まで。

(5) バーベキュー

岐阜市内だけでなく、美濃市や関市の川原は、

夏の週末はBBQをする家族連れ、若者で混雑する。県内だけでなく、県外からも多くの人が訪れる。日差しがキツイため、日陰を求めて、橋のたもとが人気スポットである。北海道では何かイベントがあると必ずジンギスカンをする、という話を聞いたことがあるが、同様に、岐阜県では必ずBBQを行う。その証拠に、大阪では一家に一台タコ焼き器があるが、岐阜では一家に一台BBQセットがある（岐阜県庁内調べ）。

4 歴史にまつわるエトセトラ

奈良の正倉院には、日本最古の戸籍が残されている。それは大宝2年（702年）の「^{はにゅうり}半布里戸籍」と言われるものであり、現在の岐阜県富加町に当たる。

このように岐阜県は非常に古い歴史を有し、見るべき史跡も多い。しかし今回は、近年大河ドラマや映画で話題となっている関ヶ原について記したい。

関ヶ原は、畿内と東国をつなぐ隘路と言える。北からは伊吹山がせまり、南には養老山地がある。どうしてもここを通らなければ東国から都に行けない、また、美濃・尾張にある肥沃な濃尾平野がたくさんの農民（兵士）を養い得た、という事情から、歴史上、数々の事件の舞台となった（と思う）。

古くは壬申の乱。当時の都は近江京であったが、不破関（岐阜県関ヶ原町）と美濃の地をどちらが先におさえるかが戦を決した。先に不破関をおさえ、美濃・尾張の兵を配下においた大海人皇子（天武天皇）の勝利に終わった。

織田信長も、美濃を攻略して「天下布武」の朱印を使用し始め、天下統一への野心を明らかにした。足利義昭を奉じて京都に入っただけでなく、その後も、将軍が攻められると、直ちに駆けつけている（駆けつけられる位置に岐阜城はあった）。

「美濃を制する者は天下を制す」という言葉が生まれた所以である（司馬遼太郎の造語とも言われるが）。

そして関ヶ原の戦いであるが、これは様々な偶

然が重なってこの地が決戦地になったと言われる。ただ、既述のとおり隘路であるので、東軍と西軍がここで激突することも必然であったのではないかと個人的には思う。

現在でもこの隘路を、東海道新幹線も、東海道本線も、名神高速道路も、国道21号線も、ひしめき合いながら通過している。

5 観光にまつわるエトセトラ

私の親世代までの観光旅行と言えば、JTBのツアーに申し込む、というものが一般的であった(と思う。JTBに他意はない)。しかし、旅行プランを個人で組むようになり、また、名所・旧跡を見るだけでなく、その土地でしかできない体験をしたい、というニーズが強まっている。私の尊敬する人が、観光の極意は「今だけ、ここだけ、あなただけ」であり、「いつでも、どこでも、誰にでも」というサービスでは人に感動を与えることはできない、とおっしゃっていたが、そういう意味では、岐阜県は、ここでしか出来ない体験型観光の宝庫であり、先進県であると言える。

春は、山菜とりやタケノコ掘り、夏は鮎の友釣り、秋は栗ひろいやキノコ狩り。もちろん、普通のフルーツ狩りもあちこちで行われているが、上記の体験は(鮎釣りを除いて)私が岐阜で初めて経験したものばかりである。

知識・経験の豊富なガイドさんから、毒キノコと食べられるキノコの見分け方を教わったり、タケノコの掘り方を教えてもらったりしながら、生まれて初めての体験ができる。それは、深く記憶に残り、一生の宝物となる。

(1) 飛騨高山

岐阜で観光と言えば飛騨高山が有名である。高山市街の古い町並みや、高山祭(ユネスコ無形文化遺産)があり、観光客数は、5年前の平成23年に348万人であったのが、平成28年には451万人と、100万人も増えている。

また、外国人観光客も多く、毎日行われている宮川沿いの朝市では、野菜や漬物や工芸品を売っているおばちゃんたちが普通に英語でやり取りを

している。

なお、「観光なら高山がお勧めです。」と言うと「えっ、飛騨高山って岐阜だったの?」という反応が多く見られる。岐阜県です!!

(2) 白川郷

合掌造り集落があり、ユネスコ世界文化遺産にも認定されている。雪をかぶった家々の風景はあまりにも有名である。豪雪地帯であるため、雪があまり積もらないように、あのような、60度という急な角度の屋根になったという。あの屋根の中はどうなっているのか、というお尋ねも多いが、各家庭で養蚕をしていたようである。

なお、「白川郷いいよ。」と言うと、「えっ、白川郷って(以下略)

(3) 栗きんとん

中津川市や恵那市といった岐阜県東部地方の名物と言えば栗きんとん。秋になると、和菓子屋さんが、それぞれの特色を出した栗きんとんを一齐に売り始める。甘いもの、さっぱりしているもの、ねっとりしているもの、サクツとしているものなどなど、そのバラエティの豊富さには驚くばかり。

残念ながらそれほど日持ちしないため、ぜひ岐阜に来て食べていただきたい。

岐阜県東部と言えば、2018年4月からのNHK連続テレビ小説「半分、青い。」の舞台でもあるし、リニア中央新幹線が通る予定地でもある。下呂温泉も近いので、泊りで観光がお勧めである。

なお、「中津川」と言う、「えっ、中(以下略)

(4) 郡上おどり

約1か月にわたって、郡上八幡の町内各地で開催される「郡上おどり」。特に決まりはなく、櫓の上で、お囃子と笛がはじまれば、その周囲の人々が踊り始める、というものである。素人であっても、しばらく観察していれば踊りを覚えられるので、あとは輪に加わって踊り続けるのみ。通常、夜だけであるが、お盆のころは徹夜で踊り続

ける「徹夜おどり」も行われる。盆踊りというと、村の人だけで盛り上がる、という印象があるが、郡上おどりに関しては、観光客を排除するわけではなく、誰にでも開かれているのが特徴である。

なお、近所のスーパーマーケット主催の夏祭りに行ったところ、かわさき（郡上おどりの曲）が流れるや、誰でも当然のように踊り始めた。岐阜の人々には、自然と踊りが身に付いているのであろう。

(5) キャンプ

個人的にキャンプや登山が好きだが、東京で暮らしていたころは、2時間、3時間かけて渋滞に耐えながら山梨県や埼玉県までキャンプに出かけていた。

ところが岐阜に来てみると、近いところでは15分も車で走れば、しっかりしたキャンプ場、例えば岐阜市最高峰百々ヶ峰（417.9m）の麓の「ふれあいの森キャンプ場」に行くことができる。

それどころか、近隣県の人々には「岐阜県はキャンプに行く場所」と認識されている模様で、県内各地にそれぞれ特色を持ったキャンプ場があり、他県ナンバーの車も含め、多くの人々で賑わっている。

その中で個人的に印象深かったのは「白山ブナの森キャンプ場」（白川村）。国道を離れ、一車線の道を走ること30分。樹齢数百年のブナの木が林立する深い森の中に、そのキャンプ場はある。エスペース・スーパーライトの4～5人用テントを張り、薪を集め、BBQをする。夕闇に包まれると、焚火の爆ぜる音以外は完全なる静寂。人里離れているので、星が素晴らしく綺麗であった。「カサッ、カサッ」と、夜間、何かの獣がテントの周りをうろつく音がするのはご愛嬌である。

(6) 登山

岐阜県の中でも、特に他県の方々と世界に対して自慢できるものを「岐阜の宝もの」として県が認定しているが、その一つとして「五色ヶ原の森」（高山市）がある。乗鞍岳の麓に広がる広大な樹林帯であり、ガイド付きでない立ち入りが

できないよう管理されている。

ここを1日かけてハイキングするプランが設けられているのであるが、自然の素晴らしさと、ガイドさんの知識の豊富さに圧倒される体験であった。

近年、山に登ると中高年の方々と非常に多く見かけるが（自分もその一人であるが）、登山経験も体力も技量も、人それぞれ、様々である。今後さらに中高年の方が増えていくことを想定すると、これからの登山は、ガイドと一緒に歩くのが主流になっていくであろうし、また、環境面や安全面からもそうなるべきであると思う。そういう意味では、この五色ヶ原方式は、先駆的な取組と言える。

いずれ行きたいと思って密かに研究しているニュージーランドのトレッキングでも、小屋やルートを公的機関が整備した上で、入山するにはガイドを付けることが必須となっているようだ。

（おまけ）

五色ヶ原に来たついでに、乗鞍岳（3026m）にも登った。乗鞍岳へのアプローチ道路はマイカー禁止なので、麓でバスに乗り換え2700m付近まで。そこから1時間半歩くと山頂に至ることができる、日本で最も手軽に登ることができる3000m峰と言われている。雪溪の上を歩くようなルートもあるが、小学生の息子でも軽々と登頂することができた。

なお、乗鞍岳へのアプローチ道路は、もともと第二次世界大戦時に、陸軍が高地に航空エンジンの実験施設を建設することを計画し、そのための軍用道路として建設されたものである。しかしながら、敗戦により岐阜県の県道に編入されたという経緯があり、このため、日本全国を見渡しても相当早期から、山岳観光用の道路として活躍している。

(7) スキー

中部国際空港に降り立ち、レンタカーで2時間走れば、岐阜県の本格的なスキー場に至ることができる。海外から最もアプローチしやすいスキー

場のある県としてもっともっと売り出していくことが可能であると思う。特に、高鷲ICを降りれば、鷲ヶ岳、ホワイトピア、高鷲スノーパーク、ダイナランドと、大きなスキー場が4つもあり、選り取り見取りである。

岐阜市内からであれば、朝6時に出れば、8時前からそれらのスキー場で滑ることが十分可能であるが、そこまで気合が入ってなくても、冬の日曜日の朝「今日どうする〜？」とゆるい感じの会話を交わし、昼には揖斐高原スキー場で午後専用リフト券で滑っている、ということもよくある。

6 エピローグ

岐阜城近くの家から県庁まで片道約14km、長良川沿いを毎日自転車で通勤している。長良橋で河川敷に下り、金華橋、忠節橋、大縄場大橋、鏡島大橋、河渡橋、JR東海道本線をくぐり、穂積大橋で国道21号線に上がるルートだ。危機管理のためとか、健康のためとか、いろいろ理由は付けられるが、やはり最大の理由は、川沿いを走ることが気持ちいいということだろう。長良川は日々違う相貌を表わし、昼夜を舍かず、一瞬としてとどまることはない。

春は日ごとに暖くなり、日も長くなる。奥美濃の山々は霞み、長良川では鶺鴒が始まる。金華山は、その名の由来となったように、ツブラジイの花が咲き乱れ、山全体を金色に彩る。何もなくともウキウキする季節である。

夏は長良川が一気に活気づく。朝から鮎掛けの釣り人が川に立ち始め、夕方にはBBQをする人々で川原は賑わう。帰宅が遅くなったときは、ちょうど鶺鴒が松明を灯しながら狩り下ってくるのを見ることができる。鶺鴒観覧は、船に乗って見るものであるが、川岸に座っていても見ることはできる。

秋は台風が来るごとに気温が下がっていく。県立岐阜高校の生徒が河川敷で体育大会の応援練習をしている。鶺鴒は10月15日まで。鮎掛けも終息していく。

冬は厳しい寒さとの戦いである。伊吹山は雪化

粧をし、自転車に乗っていると、伊吹嵐が骨まで染み透る。17時には暗くなり、澄み切った夜空に、星々が誠に美しい。

7 まとめ

岐阜県の素晴らしさ、奥深さはまだまだ語り尽くせないところであるが、ここでいったん筆を置くこととしたい。本稿を読まれた方が、「面白そうだから、岐阜に遊びに行ってみようかな。」とっていただけたとしたら、筆者として、これに勝る喜びはない。

岐阜は、知れば知るほど、体験すれば体験するほど、新たな魅力を表わしてくれるところである。私自身も、引き続き岐阜を究めていきたいと考えている。